コロナ禍中のたすけ合い

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

ニューヨークの街並みも徐々に、活気が戻ってきた。レストランの屋外での営業が許可され、歩道や車道に設置されたテラス席に人々が繰り出し、久しぶりの外食を楽しむ情景があちこちで見られる。テラス席での営業は市が全面的にサポートし、何とか元の状態に近づけようとする試みでもある。ただ、文化施設や教育施設はまだ再開できず、文化協会も閉館したままになっている。そんな中、人種差別に反対する抗議活動が各地で行われ、何百年もの間に積み重ねられてきた数え切れない悲劇が今、アメリカ国民としての責任として突きつけられている。人々の心は混乱しながらであっても、新しい世界へむけて葛藤しているように感じられる。

そんな状況にあって、数々のほんのりとしたたすけ合いの姿があちらこちらで見られている。

最前線で命を危険にさらしながらも働いている医療従事者などへの感謝の拍手「CLAP FOR NYC」や、市内 1,800 カ所のデジタルビルボード（看板広告）に掲載された励ましや感謝のメッセージ、そして、様々な差し入れや感謝の手紙が医療現場に届けられた。

天理教の信者の中にも医療従事者が数名おり、地域の人々や天理教の信者同士の陰からの応援が心の大きな支えとなったようだ。

彼らは次のように語ってくれた。

「感染防止のため家族と隔離して住み、よく孤独感に陥ったが、家族や友人の前向きな言葉、愛、サポートのおかげで、大変な状況を乗り越え、日々生きていくことができた。」

「暗い霧が立ち込める中に、希望を与えてくれる一筋の光があった。地域コミュニティが、毎日食べ物を寄付してくれたり、手作りのマスクを届けてくれたり、近所の子供たちからお礼の手紙やポスターも頂いた。ニューヨーク婦人会からは、無数の手作り手術帽やマスクが寄贈された。」

写真　手作りマスクやスクラブキャップの寄贈
ニューヨーク大学附属病院

天理教ニューヨーク地区婦人会では、会員たちが手分けして約 1,000 枚のマスクやスクラブキャップ（手術帽）、ヘアバンドなどを作製。病院、ナーシングホーム、ホームレスシェルターに寄付し、大変喜ばれた。

また、中には新型コロナウィルスに罹患した信者もいた。お願いづとめや食事の差し入れ、病院へのお世話どりや励ましの声などが数多く寄せられ、幸いにも皆無事に回復された。

オンラインを通して各会の活動も活発に行われている。ニューヨーク青年会では、毎週金曜日夜の「気軽な集い」や様々な勉強会。婦人会では、例会や教理勉強会。普段遠くて来られない人も参加することができ、会話を通してたすけ合い、繋がりを深めている。少年会や学生会もお楽しみ行事がオンラインで毎月開催されている。

文化協会での取り組み

夏休みの間は、いつもなら日本に一時帰国する家族が多いが、今年は帰国できずにニューヨークで過ごす人々が多かった。サマーキャンプなどのイベントもほとんどキャンセルになっていたので、文化協会では、そのような人々の少しでも手だすけになればとの思いで、初めての試みで「オンライン・サマークラス」を企画した。

幼児部から小学中学年までを対象として、毎週２回、日本語に触れる機会を設けた。非常に好評で現在 33 名の子供たちがオンラインを通して楽しく勉強している。

また、幼児部の子供たちを対象に「オンラインお楽しみ会」や「貼り絵プロジェクト」が行われている。この貼り絵プロジェクトは、みんなで一つの絵を完成させる事で、今の大変な状況をみんなで乗り越えたという達成感を覚え、様々な人の支えがあって今があるという感謝の気持ちを育む事を目的としている。子供たちに感謝を伝えたい人の似顔を描いてもらい、対面授業が再開した時に持ち寄り、貼り合わせて一つの大きな作品を作るプロジェクトだ。どんな作品ができるか今から楽しみな事だ。

保護者からは、「素敵なイベントを開催して頂きありがとうございます。涙が出る程嬉しいです。」、「今年は日本に帰ることができないので、大変な中にもかかわらず、日本語に触れる機会を提供してくださり、とても感謝しています。」、「貼り絵アート、いろいろと考えていただいて、大変ありがとうございます。」などの嬉しいコメントをいただいている。

保護者の皆様向けには、「天理ジョイカフェ・オンライン」を時々開いて、気軽に日本語で話し合う場を提供し、夏休みの過ごし方や子育ての情報交換の場となっている。

そのような折、画家でニューヨーク日本人美術家協会の飯塚国雄会長が新型コロナウィルスに感染して亡くなった。飯塚さんは 1961 年に渡米、ニューヨークで活動している日本人や日系作家を支援するために美術家協会を設立し、昨年文化協会で 40 周年を祝ったばかりだった。文化協会が今の場所に移転して以来、毎年 20 年間にわたり、美術家協会の展覧会を開催してきた。ちなみに飯塚さんは、俳優小栗旬の叔父に当たる。

飯塚さんの遺志を継いで、家族の方が文化協会で飯塚国雄基金を設立して、若い芸術家たちのサポートを続けてもらいたいとの申し出があった。

どのような形で発展していくか、まだ分からないが、ニューヨークの若い人々の育成の手伝いをさせていただけることは、とても有難いことと楽しみにしている。

コロナ禍中においても様々なたすけ合いの姿が見られ、この期間に育まれている人々の繋がりや心の絆が、これから迎える新しい時代にとって大切なものになってくるように思う。文化協会としては、たとえ微々たる歩みであっても、社会にお役に立てる活動を続けていきたいと願っている。